

「浦の恵」に託す浜の活性化 —アワビ養殖にかけた私たちの思い—

延岡市漁業協同組合アワビ養殖グループ
甲 斐 寿 夫

1. 地域の概要

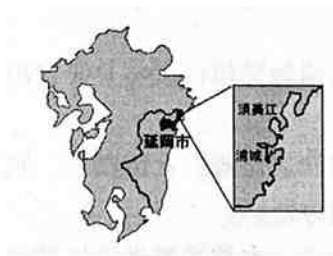


図1 位置図

私達が住む延岡市は、宮崎県の北部に位置する人口約13万人の工業都市で、街から北に延びる海岸線はリアス式海岸の風光明媚な景観が続き、日豊海岸国定公園に指定されている（図1）。また、平成18年に「日本の快水浴場百選」にも選ばれた下阿蘇海水浴場、須美江海水浴場を始め、浦城、熊野江など美しい砂浜が残されている。

2. 漁業の概要

私たちが所属する延岡市漁協は組合員242名で、昨年の水揚げは3,705トン、約20億円となっている。主な漁業は、養殖業、定置網、かつお一本釣、船曳網、底曳網、刺網、建網、採介藻などで、私たちが住む浦城・須美江地区では、養殖業、小型定置網、刺網、採介藻等を組み合わせた複合的な経営を行っている。

3. 研究グループの組織と運営

アワビ養殖グループは、須美江・浦城地区の採介藻、定置網、養殖業に従事する28歳から73歳までの17人で組織されている。主な活動は、各メンバーが実施する養殖状況の意見交換や海藻養殖の共同作業、アワビ養殖に関する先進情報の収集等を行っている。

4. 研究・実践活動課題選定の動機

私たち浦城・須美江地区の漁業者は、「あわび生産組合」を組織し、天然アワビの資源管理やクロメ等の藻場造成に努めてきた。しかし、これらの取組みにもかかわらず、天然アワビの水揚げは昭和58年の4.5トンピークに減少し、平成15年にはほとんど漁獲されず、漁業収入が大きく減少した。

また、当地区は、県内では数少ない天然アワビが食べられる場所として知られているが、アワビの減少で一般消費者が口にする機会が少なくなり、観光客からは「アワビを食べに来たのに残念」という声が多く寄せられるようになるなど、地域観光にも大きな影響を及ぼす状況となっていた。

そうした中、県外のアワビ養殖先進地を調査したところ、アワビ養殖は副業的な経営としてある程度の収入が見込め、また、私達が養殖したアワビを地元で安定供給することで、地域観光の浮揚にもつながるのではないかと考え、平成15年から普及員の指導を受けて、

アワビ養殖に取り組み始めた。

5. 研究・実践活動の状況及び成果

(1) アワビ養殖試験

①試験の方法

私たちは、殻長5～7cm程度の一口アワビの養殖を目指した。これは、短期間で安定した収入を確保することに加え、地元を訪れた観光客に気軽に食べてもらうためである。

養殖試験は、県栽培漁業協会からクロアワビ、メガイアワビの稚貝を5月と11月に受け入れて行った。稚貝は、雨樋や竹で作った付着板とともに垂下式カゴに収容し、須美江・浦城の養殖生け簀ロープに垂下し、製品サイズまでに要する期間の確認や成長・歩留まり、また地域に適した養殖技術の研究等を行った(図2)。

飼育期間中の餌は、天然海藻を週に1～2回程度給餌した。天然海藻の豊富な冬から春は、地元で生育するワカメ、アントクメをグループメンバーが協力して採取した。一方、天然海藻の少ない夏から秋は、グループ全員で乾燥コンブを購入して給餌した。また、経費節減を目的として、青森県産コンブの種糸や宮崎県水産試験場産クロメ、ワカメ、アントクメの種糸を用いて海藻養殖も行った。

②試験の結果

出荷までに要する期間は、5月に受入れたクロアワビは約1年(図3)、11月に受入れたクロアワビは7ヶ月であった。各種アワビとも冬場の低水温期に良く成長し、夏場の高水温期には成長が悪かった(図4)。また、飼育期間中の歩留まりは、冬場の低水温期が9割程度と高く、夏場の高水温期は7割程度と低かった。

以上のことから、種苗の受入は夏場の飼育を避けて11月頃に行い、翌年の夏前に製品サイズに達したものについては、できるだけ出荷することが重要であることがわかった。

また、メガイアワビのほうが、クロアワビよりやや成長がよく、歩留まりも高かった。しかし、成長についてはメガイアワビはクロアワビに比べて殻高が低いため、同じ殻長でも見た目に小振りで、販売先の用途やニーズを把握した上で選択する必要がある。

海藻養殖については、コンブ、ワカメが冬から春まで、アントクメが冬から夏まで、クロメが周年にわたって餌として利用することが可能で、その他の期間は、乾燥コンブ等を購入する必要があることがわかった(図5)。

今回の試験の結果、当地域が餌の確保も含めてアワビ養殖に適した環境にあり、技術的にもアワビ養殖が可能であることを確認した。

(2) 養殖アワビの販売戦略

次に、私たちの生産した一口アワビの品質を確認するため、試食会を開催した。その結果、参加者からは、柔らかく食味もよいという評価を得ることができ、私たちが生産した一口アワビが品質的にも優れていることを実感した。

そこで、一口アワビの試験販売を行うこととし、製品名・販売価格等をグループメンバーで協議した。当地区は、南浦地区とも呼ばれ、養殖場の眼下に広がる美しい海岸をイメージして、製品名を「ひとくちあわび『浦の恵』」、キャッチフレーズを「南浦の美しい浜の贈り物」と決め、販売促進用の幟を作成した(図6)。また、「浦の恵」の販売価格は、他県の商品を参考に製品サイズ別に1個当たり170～430円とした。

そしていよいよ販路開拓を開始し、まずはターゲットを地元を絞って、延岡市内の料理店と商談を行った。商談先からは、「天然アワビは大きいために1日で使い切れず、無駄にしてしまうこともあるが、『浦の恵』は味がよく、注文に応じて無駄なく使い切れる」と好評で、早速1軒の料理店と商談が成立した。

また、須美江地区の民宿で一口アワビの料理を出したところ、「とっても美味しかった」、「初めてアワビを食べた」など大好評で、早速リピーターを獲得した。

このように、「浦の恵」は試験販売の段階ではあるが、「売れる」という確かな手応えに加え、地域特産品になると感じたところである。

(3) アワビ養殖の収支実績及び効果

アワビ養殖の収支実績は、約1万個の種苗を受け入れた場合に約170万円の売上げとなり、差し引き70万円の利益が出ることがわかった(図7)。施設はくりかえして使えるため、養殖2年目以降の利益はさらに大きくなり、予想以上の副収入となった。

また、アワビ養殖は初期投資が少なく着業が容易で、従事する時間が短く、重労働が不要であるなど生涯現役を貫ける魅力的な漁業であることがわかった。

さらに、アワビ養殖は、餌となる海藻を養殖することで、漁場環境の浄化作用や養殖した海藻が母藻となり海藻資源の増加も期待でき、また養殖アワビを生産することで天然アワビを無理して採らずにすみ、天然アワビの資源が回復してくるのではないかと期待している。

6. 波及効果

私たちのこのような活動は、地元の新聞にも取り上げられたほか、県内でも評判になっており、宮崎県漁連や仲買人等からは、「浦の恵」の問い合わせもでてきている。

また、他の地区の漁業者や他の漁協の漁業者からもアワビ養殖に取り組みたいという声がかかるなど、厳しい状況にある漁業に明るい兆しをもたらしている。

さらに、地区内の民宿では、「浦の恵」を求めてリピーターからの問い合わせも増えるなど民宿経営にも大きく貢献し始めている。

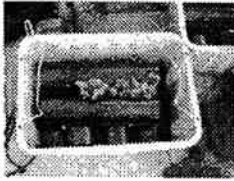
7. 今後の課題や計画と問題点

アワビ養殖は、技術的にはほぼ確立できたと考えているが、仲買人などからはさらに大きい7~8cmサイズの要望がある。これらのアワビを養殖するためには、夏場のへい死や疾病・赤潮への対応等の問題が残されている。そのため、昨年12月には比較的環境変動に強いと言われるエゾアワビとメガアワビの掛け合わせ種苗等を導入した飼育試験を開始したところであり、今後は、この試験成果の確認と、赤潮等に迅速に対応できる体制を整備したいと考えている。

また、「浦の恵」の生産はスタートしたばかりであるが、今後は生産規模を一層拡大し、安定生産・安定出荷体制を早急に整えることによって、宮崎県水産物ブランド認証化を実現するとともに、各種イベント等に積極的に参加し、「浦の恵」の知名度アップと消費拡大を図っていききたいと考えている。

最後に、水産業を取り巻く環境は厳しい中にあるが、ひとくちあわび「浦の恵」が私たち漁業者の経営安定と浜の活性化の救世主となることを固く信じている。

カゴに150個収容



養殖生け簀ろープに垂下



図2 養殖方法

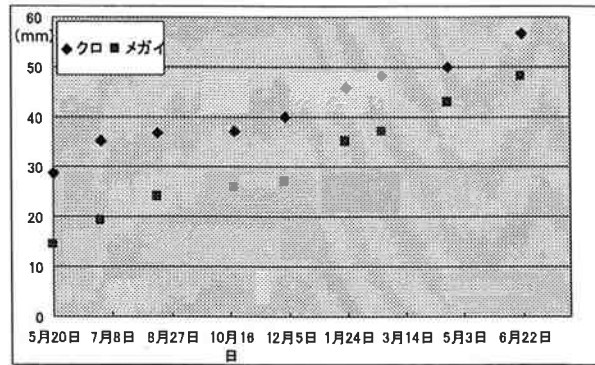


図3 成長グラフ

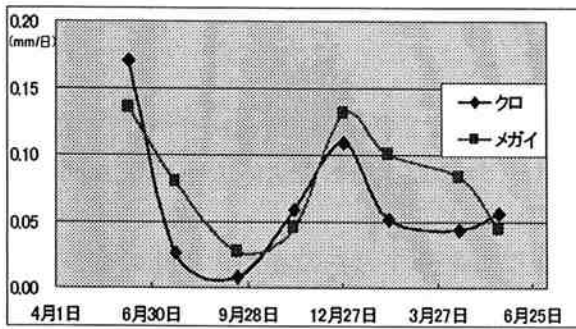


図4 日間成長グラフ

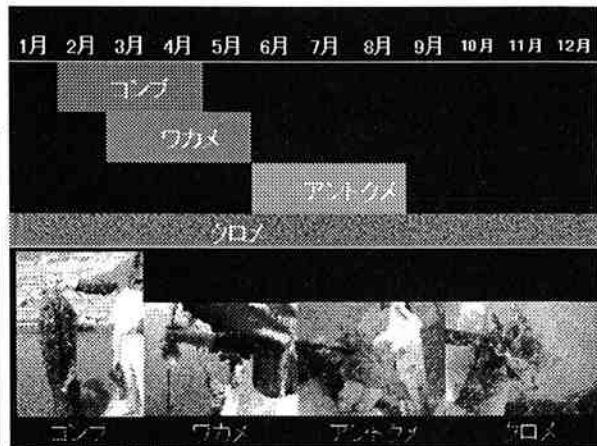


図5 海藻養殖



図6 販売促進用の幟

(千円)

収入	水揚高	1,691		
支出	稚貝代	735	単価	
	施設費	182	販売価格 (60mm)	230円
	餌代	49	種苗	70円
	雑費	10	垂下式カゴ	2,600円
	小計	976	乾燥海藻	250円/kg
差引		715		

図7 収支実績